

一般社団法人 アクト・ビヨンド・トラスト 2025 年度助成企画募集のご案内

「ネオニコチノイド系農薬問題助成プログラム」

お米から果物など幅広い農産物に用いられ、シロアリ駆除剤や家庭用殺虫剤として身近な暮らしにも入り込んでいる浸透性殺虫剤（ネオニコチノイドおよびフィプロニル）——。近年の急速な研究の進展により、環境中での持続的な慢性曝露による無脊椎動物への時間累積的毒性や、食物連鎖を通じた漁業への脅威などが明らかになりつつあります。世界の科学者コミュニティからは、生態系と生物多様性全体を脅かすことへの警鐘が鳴らされるだけでなく、ヒトの母体から胎児への移行や発達神経毒性を示す研究成果も蓄積されつつあります。

本助成は、予防原則を踏まえて、製薬メーカーの意向や現行の行政判断に左右されない独立の立場からネオニコチノイド系化合物の影響を検証する「調査・研究」活動、浸透性殺虫剤の問題点や最新の研究成果を広く共有する「広報・社会訴求」活動、浸透性殺虫剤を使わないサプライチェーンの確立をめざす「市場“緑化”」活動、国や地方の立法・行政機関に汚染実態調査や規制強化を促す「政策提言」活動を支援します。国の農薬再評価とオーガニック推進が進むいま、確実な規制強化へつながる成果を期待しています。ふるってご応募ください！（応募要項など申請書類一式は下記リンクよりどうぞ）

<https://www.actbeyondtrust.org/info/20032/>

1. 応募資格： ネオニコチノイド系農薬（およびフィプロニル）に関する問題提起や、使用の削減ないし中止に取り組む個人および団体（ボランティアグループ、NPO/NGO、公益法人、研究機関、生産者など。地域、法人格、活動実績は不問）
2. 助成分野と金額： 「調査・研究」「広報・社会訴求」「市場“緑化”」「政策提言」分野（いずれかを選択）
1 企画あたりの助成額： 上限 100 万円
※2 部門以上にまたがる案件は、1 部門を超えるごとに 1 部門あたり 50 万円を加算
3. 助成対象期間： 2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日の間に実施される活動
4. 応募受付期間： 2025 年 2 月 10 日〆切
5. 問い合わせ先： 一般社団法人アクト・ビヨンド・トラスト 助成係
電話：070-6551-9266（10：00～19：00）
Email：grant@actbeyondtrust.org
<http://www.actbeyondtrust.org>
<https://www.facebook.com/actbeyondtrust>
【12/28～1/5 は年末年始休業】



一般社団法人アクト・ビヨンド・トラストは、自然環境と人間生活の調和を目的とした市民や NPO・NGO の活動を支援する、独立した民間基金です。問題解決のための具体的・効果的・創造的なアクションを重視し、資金援助、コンサルティング、技術および人材提供、トレーニングなどを行なっています。詳しくは上記 web サイトや Facebook ページをご覧ください。

これまでの企画から

2024 年度に採択された企画例をご紹介します。

これまでに実施された企画は、アクト・ビヨンド・トラスト web サイトの「公募助成(ネオニコチノイド系農薬問題)」をご参照ください。2023 年度までの各助成対象企画について報告書をご覧いただけるほか、同サイトの「助成先活動情報」では、2024 年度助成対象企画の活動状況をリアルタイムで取り上げています。 <https://www.actbeyondtrust.org/program/neonico/>

■ 農家と消費者の参加型調査による農薬の圃場生態系への影響比較(調査・研究、広報・社会訴求)

丹波市と高島市における生き物調査及び農薬の残留濃度分析が3年目を迎えるので総括に向けた調査を行うとともに、圃場の数を増やして基礎的な水質指標とプランクトンなどを調査して統計的な解析を行い、有機水田と慣行水田との違いを明らかにする。兵庫県相生市において、生き物調査のワークショップを行い、ローカル認証の可能性を探る。成果は報告会、冊子、SNSにより情報発信する。

■ 父性曝露影響から捉えるネオニコチノイド系農薬の継世代影響評価・エピゲノム毒性(調査・研究)

環境中微量化学物質の作用が世代を越えて伝わる継世代影響が懸念されている。これまで妊娠・授乳中の母獣への曝露試験で評価が行われてきた一方で、交配相手である父獣に化学物質を投与して調べた報告はほとんどない。父親の非遺伝的な要因(環境影響)は世代を超えて作用しないと考えられてきたからである。しかしここ数年、受精前の精子の状態が子孫の疾患リスクに影響するという考え(及びエビデンス)が支持されるようになり、その背景には、環境と形質を繋ぐ鍵である「エピゲノム毒性」という新たなパラダイムが関わっている。応募者も解析を進めているが、精子 DNA のメチル化やヒストン修飾、non-coding (micro) RNA のエピゲノム変化を有力視している。本研究では、慣行農業の農薬として主流であるネオニコチノイド系農薬の父性曝露の影響とそのメカニズムを検証する。具体的には、トランスオミクス(フィジオーム・シグナル伝達・メタボローム・トランスクリプトーム)解析から、有害性発現機序(AOP)を明らかにする。

■ 秋田におけるネオニコチノイド系農薬の実態の定量的解明と環境・食の安全基盤構築の県民的展開(調査・研究、広報・社会訴求、市場“緑化”)

令和5年8月、秋田市の水道水からEU基準の30倍以上のネオニコチノイド系農薬ジノテフランと同5倍超のスルホキサフロルが同時検出された。本申請により、県民自ら流域規模の汚染実態を明らかにする。また県民のネオニコチノイド暴露量を解明し、対策の必要性と緊急性を明らかにする。考えるつどいや学習会を県内各地で実施し、環境・農業・食の実態と課題を共有し、次世代に伝える安全で豊かな環境と食をつくる取り組みを強力に推進する。

■ 環境 DNA 分析による、「世界自然遺産の島」の水田の生物多様性へのネオニコチノイド系農薬の影響評価の試み(調査・研究)

世界自然遺産登録地の西表島を含む八重山地域の水田において、ジノテフランをはじめとしたネオニコチノイド系農薬が広く使われるようになってきており、その環境影響の実態把握が急務となっている。この目的には、近年発展の著しい、コップ1杯の水からどんな生き物が生息しているのかを知ることのできる環境 DNA 分析技術が有用となりうる。そこで私は、本助成事業を活用し、本地域のネオニコチノイド系農薬使用水田と殺虫剤不使用水田の水を環境 DNA 分析に供することにより、ネオニコチノイド系農薬が生物多様性に及ぼす影響の環境 DNA による評価を試みる。